

「居合道と私」

国土交通省居合道部

三浦 尚子（釜石市職員）

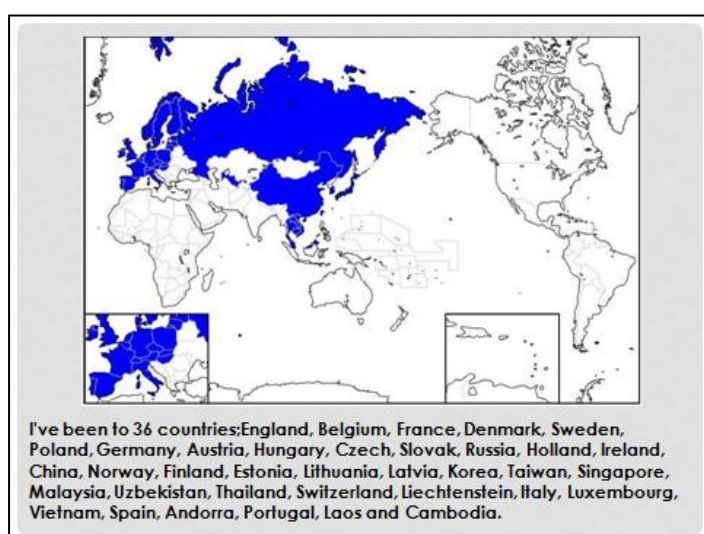
みなさんこんばんは。岩手県釜石市からきました三浦尚子です。先ほどご紹介してもらいましたように居合道は三段です。今日はお招きいただきありがとうございます。私は国土交通省居合道部となっていますが、仕事は釜石市の職員です。なかなか人の前で話すような機会はないので、不慣れでお聞き苦しいこともあると思うんですが、せっかくこのような機会をいただいたので楽しくお話ししたいと思います。よろしくお願いします。

最初に釜石市職員の私がどうして国土交通省居合道部なのかということと、自己紹介をします。そのあと釜石の震災のことや今の釜石市をちょっとご紹介しまして、居合道部のお話をしたいと思います。今日は居合道部の方がかなり多いので、居合道部の方に助けていただきながら居合の話をしたいと思います。

まず、私がどうして国土交通省居合道部なのかということなのですが、平成 20 年の 4 月から 22 年の 3 月まで 2 年間研修ということで、港湾局海岸・防災課でお世話になりました。その間に居合道部に入りました。戻ってからも練習する場所が見つかりましたので続けています。当時、2 年間お世話になった海防課での仕事は海岸事業の予算のことについてでした。東京に来る直前の仕事は市の財政で予算編成をしていたので、共通している部分もあります。金額のケタが違うということと、説明する相手が違うというぐらいで、内容的には似たような部分もありまして、面白い仕事をさせていただいたと思っております。ただ、何のために湾口防波堤を作っているかは分かっていたんですが、例えば消波ブロックがなんなのか分からなくて、海水浴場の遊具かなと思っていたぐらいなので、本当に事業の中身が分からず苦労しました。でも、全体的に楽しい 2 年間でした。今は、戻って、異動しているので、仕事は 3 つ目です。この 4 月から市役所の復興推進本部で、津波で被災した土地の嵩上げや高台への移転事業の予算の管理を担当しています。

震災前の釜石市の一般会計が全部で 150 億円ぐらいでした。今は復興の事業がありまして、自分が管理担当している課だけでも 500 億円になっています。市全体では 1,000 億円近くになっていると思います。今までは住民の皆様への説明ですとか、設計、調査、手続きなどで皆さんに見える形で工事が進んでいなかったのが復興が進んでいないのではないかと言われてきましたが、今年に

なって工事の発注がどんどん増えてまいりました。今までなかなか分かっていただけない部分があったんですが、これから目に見えて嵩上げなどが始まっていくので、どんどん復興しているな、ということを皆さんに実感していただけたらと思います。ただ、その工事が今までの釜石市ではありえない大きな金額の工事ばかりなので、今までの職員ではなかなか対応しきれてはおりません。日本中いろいろな自治体の方ですとか、国の職員の方に来ていただいて、皆さんに助けていただきながら、仕事をしている状態です。現在、私がいる部署では全部で50人ぐらい仕事をしているのですが、半分以上がよそからきていただいている方です。



趣味は旅行で、今までに海外旅行で36カ国に行きました。世界中を旅しましたが、言いたいところなのですが、いつも一人で旅行をしているので安全な所に行こうと思って、ヨーロッパとか東南アジアとかを旅行しています。なので、ユーラシア大陸だけです。次の旅行もアジアの予定

です。まだ遠くには行けませんが一応旅行が趣味ということで、行ったところを青に塗っているのですが、いつかこの世界地図をもっと青くしていきたいなと思っています。

旅行先で一人、何をしているかですが、たいていのところに世界遺産があるので、あれば行くようにしています。世界遺産ですと世界中からかなり観光客の方が訪れますので、たいてい公共交通機関で行けますし、行けないような所であれば市街地からバスツアーなどがあるので困らないです。今まで一回だけどうしても公共交通機関で行けなくて車をチャーターしたところがありました。中国の清東陵というお墓ですが、そこは路線バスが途中でなくなって、路線バスの終点のところに現地の人がバイクとか馬を持ってきていて、どちらを使うか選ばなくてはいけなかったような所でした。でも私は近くの街から車でいったのでそれに乗らなくて済みましたが、なかなか行くのが難しい場所でした。それ

以外のところはたいてい行けます。

東京に来る前からよく旅行していたのですが、東京に出てきたのでせっかくだからということで、旅行のために英語を勉強しようと思って、土曜日に学校に行きました。平日の夜の授業に行ければよかったのですが、仕事の関係で難しかったので土曜日の午前中の授業に行っていたのですが、仕事の関係で土曜日の朝に帰り、それでそのまま学校に行く、そして居合の練習に行く、という週末になっていました。でもそれなりに楽しく英語も勉強できて、釜石におりましたら学校に行って勉強することができませんので、仕事以外でも居合もやりましたし、いろんなチャンスをもたらったなと思っています。世界地図はこんな感じなのですが、日本の中は去年の春で47都道府県に行きました。最近は離島に行きたいなと思っています。ただ今年は、まだ八丈島にしか行けていませんので、これからがんばりたいと思います。というように旅行好きで、体力だけには自信がある人間でございます。よろしくお願いします。



震災のことお話ししたいと思います。先ほど仕事の中で、今年になって工事の発注が多くなってきたと話しましたが、震災からすでに3年半経っております。今年になってからやっと工事の発注が多くなってきたというのは、それだけ被害が大きかったということです。釜石市では亡くなられた方と行方不明の方が合わせて千人を超えているような状態で、今でも見つからない方もいらっしゃいます。ただ市民の皆さんも私たちも日本はもちろんですけど、世界中の皆さんから助けていただいて、なんとか暮らしていただけるよう

な状態です。

皆さんのなかで釜石に行かれた方は少ないのではないかと思います。釜石市は岩手県の沿岸部海沿いの南側部分にあります。南側ということで、そんなに寒くはないですし、雪は降りますがほぼ積もらないので、岩手の中では住みやすいと思います。釜石は鉄と魚とラグビーの街ということで「行ったことはないけれど聞いたことがあるよ。」という方が相当多くて、「釜石市から来ました。」と言うと、「ラグビーで有名ですね。」と言われます。名前は知られている街だと思っています。釜石にはいくつか湾があるのですが、この中の釜石湾の東部地区が釜石市の中心市街地です。湾の入り口に湾口防波堤があります。湾口防波堤は30年ぐらいかけて作られたものだったのですが、震災の1年前に完成していました。



しかし、これも震災の津波で壊れてしまいました。この写真のように、写っている街の平らな所はほぼ浸水しているような状態でした。湾口防波堤があったおかげで津波が押し寄せてくる力ですとか、津波の高さが軽減されて、津波が来て街の中に水が入るのが6分ぐらい遅れたために、助かったという市民

の方も多いと思います。私も避難をしていなくて、その6分がなかったら津波の被害に遭ってここにはいなかったかもしれませんでした。地震が起きたときに市役所ではなくて少し離れた施設で会議に出ていて、そこで地震が起きました。当然、会議は中止になりました。その建物が八階建てだったので周りの皆さんが避難してきました。それを手伝っていたのですが、その後、警報で津波は3メートルだと聞きました。3メートルであれば湾口防波堤があるから大丈夫だろうと思って、一緒に会議に出ていた市役所の人たちといっしょに市役所まで歩いて戻ることにしました。それは今思うと、本当はやってはいけないことでした。市役所に無事につきまして、ラジオとか防寒具とかを持って、また外に出た時ちょうど津波が来ました。津波なんて見たことがなかったので、水

のザーザー流れるすごい音がして、建物が壊れる音がして、音だけではそれがなんなのか分からない状態でした。上の方の写真みたいに建物が壊れて黄色いホコリが上がったのは見えていて、でもそれがなんなのか分からなくて「火事なのだろうか。」とみんなで言い合って、全く逃げずに低いところでこれを眺めていたんです。地震の後停電していたので、信号も動いてなくて交通渋滞が起きていました。それを職員の何人かが交差点まで出て誘導していたのですが、その中の一人が最初の津波に気づいて急いで戻ってきて、私たちに「走って逃げろ！」と叫びました。それで逃げました。ただ私たちは走って逃げる事ができたので、今こうしていますが、走れない方ですとか、渋滞している車から降りるのが遅れた方など逃げられずに、相当津波の被害にあったと思います。私たちは逃げずに市役所の前にいたのですが、ちゃんと庁舎の屋上に避難していた職員は上から津波が来るのも私たちがいるのも見えていて、「逃げろ！」と叫んだようですが、全く聞こえませんでした。それだけすごい音がしていました。停電したのですが、昼間だったので周りも見えていて、良かったと思います。これが夜中だったらもっとたくさんの方が亡くなったのではないかと思います。

私はたまたま走って逃げる途中で後ろにいた子が「靴が脱げちゃった。」と言ったので「靴なんかいいから走って逃げよう。」と声を掛けようと思って後ろを振り向いた時にちょうど津波がきたのが見えました。たまたま津波が来る方向とは違う山の方に逃げていたのも、振り返ったときにちょうど津波が横切って行くような感じに見えました。市役所前の写真だとこの角度から見て左から右に津波の波が通ったような感じなのですが、家とか車とかがごちゃごちゃに混ざった水の塊が列車ぐらいのスピードで通り過ぎて、建物にぶつかってすごい音がする、というような状態でした。実際に津波を見るまでは、水なのにどうして人が死んでしまうのか、泳げばいいのに、と簡単に思っていたのですが、あれを見たらどんなに泳ぎが得意な人でもとても泳げる状態ではないし、水の勢いが強くてぶつかる車や列車にはねられるようなレベルのものだと思います。私は振り返ったときに見ただけで怪我もしてないですし、濡れてもいないのですが、この先、津波警報が出ることがあれば、間違いなく夜でも、天気が悪くても、寒くても、絶対に逃げると思います。それまでは津波は来るかもしれないが、自分のところには来ないだろうという安易な考えがありました。あるわけがないと思っていたことが実際に起こりますし、皆さんも大げさだと思っ

でも逃げたところで全然困るわけでもないので、ぜひ最初からちゃんと逃げしてほしいです。私みたいに大丈夫だと思って歩いて戻るようなことは絶対にしてはいけないと思います。

その後、私は自分が住んでいたアパートも被災したので、いろんな方にお世話になって3月中は避難所にいました。そのあと5月ぐらいまでは市役所が用意した職員用の避難所にいました。6月になって、仮設住宅に入って、今も住んでいます。ただ、地震と津波でいろんなものを無くしましたが、そのおかげといったら変ですが、東京でお世話になった方が釜石を訪ねてきてくれて、相当たくさんの方に再会することができました。なので、どんなに悪いことでも悪いことばかりじゃないと思います。

この東部地区釜石湾に面した市街地は、先ほどお話した湾口防波堤と海岸事業で整備する避難路のおかげで他の地区よりも嵩上げの高さが低く計画できました。低くなったおかげで残った建物を修理して、そのまま使うことができます。建物が残っているというのも防波堤があったからで、市内の他の地区ですと、ほとんど建物が残りませんでした。私が見た津波というのは、釜石湾のところなので、防潮堤がありますし、お風呂の水が溢れるようにワースと防潮堤から溢れて街の中に入った勢いと量なので、他の市内の津波はもっとすごかったらうと思いました。他の地域の



写真なのですが、これは唐丹町と鵜住居町という所です。唐丹町というのは市の南部で、ここに大きい漁港の防潮堤があったのですが、全部倒れてしまい、下にあった集落は全てなくなっていました。ここは昔から津波がよく来るところだったので、皆さん結構、避難できていました。そんなに亡くなられた方は多くなかったです。鵜住居町はいろんなことで、有名になってしまいました。まず一つ目が、小中学生が自分たちで判断して逃げたということです。私も鵜住居町の小学校、中学校の出身なのですが、当時から避難訓練が大げさじゃないかと思うぐらい山

ん結構、避難できていました。そんなに亡くなられた方は多くなかったです。鵜住居町はいろんなことで、有名になってしまいました。まず一つ目が、小中学生が自分たちで判断して逃げたということです。私も鵜住居町の小学校、中学校の出身なのですが、当時から避難訓練が大げさじゃないかと思うぐらい山

の方に逃げる訓練をしていました。結果的に今回子供たちが自分たちで、判断して逃げた場所が当時避難訓練していた山だったので、そこまで逃げないと助からなかったんだなと思うと、避難訓練は本当にためになったのだと思います。もう一つは100人を超える人たちが市の防災センターに逃げたのですが、被災してほとんど亡くなってしまいました。裁判になっているのですが、その防災センターを建てるときには、津波がそこに来ないと思って二階建ての建物を建てたんですが、もし屋上がなければ、一人も助からなかったぐらいの津波でした。そんな状態ですので、ほとんど建物も残らず嵩上げもかなり上げないと人が住める状態にならない。なかなかこちらの方は事業も進んでいません。全然先が見えなくてもともと住んでいた方には苦情を言われながら、事業をやっているような感じです。復興の状況は私の資料の中の「釜石市の歩み」の方にも載っていますので、ご覧ください。



県内の被災地はどこも同じような状態で工事の進みも良くなって、なかなか楽しい話題がないのですが、釜石に関しては、鉄に関連したことで九州、山口県の皆さんとともに世界遺産登録に向けて取り組んでいます。この「明治日本の近代化産業遺産群」の中に釜石市の史跡が入っております。多くが九州

と山口県なのですが、釜石市と静岡県伊豆の国市が入っています。福岡9カ所、長崎8カ所、山口5カ所、鹿児島5カ所、佐賀1カ所ですが、釜石市で、日本で最初に洋式高炉が作られてその技術が九州の方に伝わりまして、それが日本全国に伝わったことになっています。

この登録の候補に入っている史跡は橋野高炉跡というところなのですが、実は最初に成功したのは大橋という場所で、実は全然違います。大橋で成功したあとに橋野でやりました。橋野の方が、土地が広くて石炭や鉄鉱石や水があったということで移転しました。大橋の方は何も残っていなくて、今は石碑があるだけです。石碑があって、その鉄鉱石を掘った坑道とかは全部残っていま

す。今でも鉱山の会社が営業しているので、見学で行ったりしたら楽しいです。私が東京にいた間だと思うのですが「官僚たちの夏」がドラマになった時に炭鉱の事故の場面を釜石でロケしています。市職員がかなりエキストラで出ていて、非常に楽しみにして見たのを覚えています。

世界遺産の登録の状況ですが、釜石ではイコモス（ICOMOS）の調査員が9月に来られて施設を見ています。10月5日までに九州も含めて全部見て帰りました。その結果が来年の5月で、それが登録勧告であれば、夏の世界遺産委員会で審議されるらしいです。釜石の担当職員が言うには世界遺産になるのは間違いないということなので、ぜひ皆さんにも来ていただきたいです。ただ問題があるのが、先ほど中国の話をして、路線バスが途中まででそこからバイクか馬だったという話をしましたが、橋野高炉跡も今のままでは公共交通機関で行くことができません。バスが途中までなのです。そこに中国みたいにバイクや馬はいないので、見たいということなら是非私の方にご連絡していただければ、ご案内します。そうでないとちょっと行けません。被災地が今どうなっているのかもあわせて、せっかくなので釜石に来て見ていただければと思います。ちょっと遠いので、気軽に来て下さいとは言えないのですが、お待ちしておりますのでよろしくお願いします。

いよいよ、居合道のお話をしていこうかなと思うのですが、まず私がなぜ居合道始めたのか、今までどのようにしてきたのかというようなお話をしていきたいと思います。海防課に来てすぐに同じ課の方に誘われました。そのときには居合道というものがどんなものか、見たことも聞いたこともなくて、全然分かりませんでした。それで「分かりません」と正直に話をしたんですね。そうしたらどなたかの審査会の昇段試験の映像を見せてくれました。その中の女性がすごくカッコよくて、「やってみようかな。」と簡単な気持ちで返事をしそうになりました。しかし、私は吹奏楽部で楽器の演奏をやっていたので、子供のころからずっと運動部に入ったことがなく、できるかどうか分かりません。当時、屋上で毎週一回やっているといわれたので稽古を見に行きました。見に行ったときに4、5人の方が稽古されていました。そこで、全然分かってない証拠なんですけど、結構年配の方がやっていたので、自分もできるだろうと思ってしまいました。ただ、今から思うと年配の方は先生だったので、できるのは当たり前でした。そういうわけで、勘違いで始めてしまい、次の日に道具を買いにつれて行かれて、すぐ稽古が始まりました。さきほどお話しましたが、海外

旅行に結構行っていたので、日本的なことにも興味がありましたし、いろいろな方と知り合いになれるだろうということもあって挑戦する気持ちになりました。普段生活をしていたら、袴をはいて、刀を持って、というような機会はないので、全く着方もわからず、私はまともに正座もできず、正座すると足が痛くて、最初は全然練習になりませんでした。よく始めたなと自分でも思います。どんなものかご存知ない方もいらっしゃるので、「居合とはどんなものですか。」と聞かれたときには「袴をはいて日本刀をもって自分と同じ身長、体重の人を仮想の敵として演じます。」と答えます。「日本刀で、型を演ずるときにはたまに斬り合うのですか。」という方もいて、「それでは死んでしまうでしょう。そんなことはないです。」と話をします。また、服装は袴といっても具体的に思いつかない方もいると思うので、「剣道の防具がない感じで、竹刀ではなく日本刀を持っています」というように話をしています。

最初に習うのが三付けと言われるもので、「目付け、抜き付け、着付け」の3つです。「目付け」は、私は本当に毎回注意されるのですが、どこを見るのが大事です。敵をずっと見ている訳でもなく、敵を見つつ周り全体を見るようなことで、「遠山の目付け」と言われています。それなのに私は手元を見たり、床を見たりして、見るところがおかしいという指導をいただいています。それから「抜き付け」というのは刀を抜いた瞬間に、相手が倒れているぐらいの気持ちでやらなければいけない、抜く前に自分が勝っているという気持ちでやるというのが、大事だということです。着付けも文字通り服装を正しく着ることです。ぐちゃぐちゃにならないよう、しわがないように着ます。姿勢も大事なので、東京から戻ってきた私を見て、みんなに背が伸びたかっていわれるぐらい姿勢がよくなっていたようです。普段運動をしないので、最初の稽古が始まったころは筋肉痛がひどくて力が入らず、地下鉄の階段を降りられず、エレベーターに乗っていました。

初めてすぐの冬に一級の試験があり、それに合格できたらそれでいいかなと簡単な気持ちでやっていました。稽古も昼休みだけだったのですが、これは間に合わないと思って、土日、横浜へ稽古に通うようになりました。その横浜にいつて何に驚いたかといって一番驚いたのは稽古のあとに、絶対に飲みに行くことです。それが、初めに行った時に朝から稽古をやって、お昼なのにお酒をたくさん飲んで、今でも忘れられませんが、お店の日本酒がなくなったんです。それ以来そういうことはないのですが、たまたまだったのかもしれませんが、最初

だったのでこんなことがあるのかと本当にびっくりしました。しかし、ただ飲んでいるわけではなく居合の話や、そこでしか分からないこともあるので飲み会も大事です。ぜひ皆さんも参加する際には、稽古プラス飲み会があるということを考えていただければと思います。

始めたのが平成 20 年の夏ぐらいで、その年の冬に一級を受けて、3 月に初段の試験を受けるあたりでは、「とりあえず一級でいいや。」という気持ちはなくなっていました。「帰る前までには二段はとれるよ。」と言われたので、二段は欲しいなと思うようになりました。釜石に戻ってから稽古する場所があるのかも気になっていました。今はインターネットで何でも調べられるので、釜石、居合道と入力してパソコンで調べました。そしたら出てきたのが釜石市長のプロフィールで全然知らなかったのですが、市長のプロフィールに居合道二段って書いてありました。びっくりしました。それで、出張で市長が東京に来たときに聞いたら、剣道の人たちと一緒にやったと言われました。当時、市内の剣道の元締めみたいな人が釜石市の職員でした。「その人にきけば稽古する場所があるはずだよ。」と言われたので、自分が出張で釜石に行った時にその人に会って、場所があるということが分かりました。しかも、今は退職しているのですが、その人も若いときに市の港湾に関係する部署にいて、なんと今日来られている居合道部の方も知っているということで、私もびっくりするようなご縁がありました。

二段に合格してそれまでは居合道部の刀を借りていたのですが、3 月に帰るまでの間に、とうとう自分の刀を買いました。その頃にはとりあえずやってみようという気持ちはなくなって、続けるという気持ちになっていました。どうしてそういうふうになったのかというと、やってみたら楽しかったということに尽きるのではないかと思います。平成 22 年の 4 月に釜石に戻ってみると、五段の先生が 2 人いらっしゃったのですが、「人に習ったことがない。岩手の試験は基本的に落ちない。試験を受けず五段になってしまい、お教えできません。逆に私に教えてください。」とその五段の先生が、私に言われました。それで困ったことになって、時々東京に来るようになりました。釜石に戻った年は仕事が新しくなったのと、引っ越しなどがあり、あんまり稽古ができずに、春の大会があるのですがその年は大会には出られませんでした。次の年に出ようと思っていたのですが次の年は震災が起きまして 4 月、5 月は大会に出るような状態ではありませんでした。先ほどもお話しましたように被災して仮設住宅にいる

んですが、本当に住んでいる場所が海に近かったようで、アパートは跡形もなく、何か思い出の品が見つかることも全くありませんでした。当然刀も家にあったので、全部なくなりました。全部なくなった状態だったのですが、じゃあこれでやめようとは思わなくて、どうやって居合をまた始めようか、いつからできるかなということを考えていました。居合道部の皆さんからのご連絡をいただき、刀を譲ってくれる方も見つけていただきましたし、道着を買いに行くときに一緒に行っていただきました。その年の夏には道具が全部揃って、釜石での稽古の場所も、夏ぐらいまでは被災した人がまだ住んでいる状態だったのですが、そこも秋には空きました。そのころから練習を再開したと思います。なかなか時間が取れなかったのですが、年明けの3月に本当は三段の試験を受ける受験資格があるということで、受けるかどうか相当迷いました。ただ、半年ぐらいしか練習していませんし、慣れない刀とか新しい帯が硬いとかで全然ダメだったのですが、毎年合宿があるのでその合宿の時に受けてみようかと思い、東京都の昇段試験を24年3月に受けました。落ちてもともとだなという気持ちの方がよかったのかもしれないのですが、ほとんど緊張せずに受かって、そのとき三段になれました。

その年はやっぱり仕事でバタバタしていたので、大会に出ず、去年の5月が初めての大会でした。大会というのがどういうものか、なにをやるのか分かっていなくて、岩手県では三段でも東京ではあまり習ってない技をやらなくてはいけないということで当日指定された技ができませんでした。勝手にできるやつだけで5本やりました。ただそれが、先生がいないはずの釜石から一人出場して、それなりにできていたようで、岩手県の先生方からうちに来て練習したらいいよとか声を掛けていただき、入賞は当然できないんですが、敢闘賞ということで賞状をいただきました。大人になって賞状をもらうことはなかなかないので、すごく嬉しかったです。それで「来年もやろう。」と思って、今年の春の大会にも出ました。去年できなかった技も一通り覚えていたので、一応やりまして、人が少ないこともあって準優勝しました。準優勝以上は東北大会に出していただけるので、岩手県の代表として東北大会に行くことになりました。たまたま東北の大会が今回は岩手県でした。全県来ていましたが、福島県が強くて、人数も一番多く、すべての段にエントリーしていて、優勝しました。岩手は3位でした。

私は初戦で負けましたが、岩手県の代表になることはなかなかありませんの

第44回東北居合道大会



釜石市長と私

東北居合道大会



で本当に貴重な経験をさせていただきました。調子に乗って、県の剣道連盟から「あなたを東北大会の代表にします」という文書が届いた時に、全然用もないのに市長室に行って撮った写真がこれです。市長は二段なので、市長に東北大会に出ると言ったらすごくびっくりされました。よくこういう写真が地元の新聞に載

るのですが、それは全国大会からで、これは本当に勝手に写真を撮っただけです。「いつ稽古しているの。どこでやっているの。」と聞かれました。いつか市長と一緒に稽古できたらと思っていますが、今はちょっと忙しいみたいです。

東京のように競技人口が多いと大変ですけど、岩手は結構人数が少ないので、最初から県大会に誰でも出られます。2位以上になれば東北大会にもすぐに出られます。ですから東京じゃない方がいれば、地方でやった方がいろいろなチャンスがあるかもしれません。

国土交通省の居合道部の方がたくさん見に来てくださいましたが、昨日、神田明神で奉納演武をさせていただきました。30周年ということで、過去にも鎌倉だとかで奉納演武をしたことがあるようですが、私が入ったのは平成20年で、25周年の記念誌を作るということで作文を書いた記憶はあるのですが、昨日のような奉納演武みたいなことは初めてでした。大会にしても審査にしても人前でやるというのは同じなのですが、一般のお客さんの前でやるというのは全く初めてで、緊張しましたが、すごく楽しかったです。

今夜は居合道部の方がたくさんいらっしゃるのですが、今日のこの話をいただいたときに私に話があったということは新入部員の勧誘のためだと勝手に思いまして、今日は居合道部の紹介をメインに考えてきました。ですから、先生方にも一緒に答えていただきたいと思います。

いろいろな流派があるのですが、そもそも居合道の開祖は1542年ごろ現在の山形県村山市に生まれた林崎甚助という方で、神様から神託を得て技を習得したということになっています。今はその林崎甚助自身も神社に祀られていて、

村山市に林崎居合神社があります。国土交通省居合道部は夢想神伝流で、これが全国的に多いようで、たまたま岩手のほとんどの方も夢想神伝流でした。そこはすごく良かったなと思います。

全日本剣道連盟居合

- | | |
|----------|-----------|
| 一本目 前 | 九本目 添え手突き |
| 二本目 後ろ | 十本目 四方切り |
| 三本目 受け流し | 十一本目 総切り |
| 四本目 柄当て | 十二本目 抜き打ち |
| 五本目 袈裟切り | |
| 六本目 諸手突き | |
| 七本目 三方切り | |
| 八本目 顔面当て | |



先ほどから審査会、大会とお話をしていますが、審査や大会では礼法ですとか、技の正確さで競い合うものなのですが、その大会で多くやるのが全国で統一されて決まっている全日本剣道連盟居合の 12 本の技です。技の名前がいろいろありましていろんな流派の技を少しずつ取り入れて作ったもので、すべてが、敵

が攻撃してきて、自分を守るために刀を抜いて勝って、納刀するところまでで、相手の敵の数ですとか切りつける場所が決められています。12 本こんな感じになっているのですが、技をやる前にならず神様や先生、お互いに礼をして、刀にも礼をします。刀に礼をしているのがこの写真です。これは釜石で稽古している写真です。大会とか審査では礼法など含めて技を五本やって、6 分以内に終わるようにします。勝ち負けは正確さということになります。今、この 12 本を全部説明すると大変なことになるので、このうちから三つ紹介したいと思います。

全日本剣道連盟居合

一本目 前
対座している敵の殺気を感じ、機先を制してこめかみに抜き付け、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。



最初の一本目「前」ですが、敵は一人、自分の前にいる想定です。今日お配りしている資料に私の写真がついていますが、自分の正面に敵が一人います。そこから自分が刀を抜いて、座っている相手のこめかみに抜き付けるとというのが、一番左の写真です。それから斬り付けられた敵はこめ

かみ付近をいきなり攻撃されたので死んではいないですが、後ろによける。そこを一步踏み込んで、上からまた斬るということになります。斬ったあと、刀についた血をはらう動作が真ん中の写真です。一番右は納刀したところです。終わったらまた立って、元のところに戻ります。全部の技がはじまりから終わりまでこんな感じですね。この本には決まっている12本をどうするか細かく書いてあるので、資料はそれをそのまま写したものです。一個の技にこれだけ決まりがあつてすごく難しいですが、稽古のときにどうするかというと一応動きを覚えて、やって、先生に見ていただき、どうなのかご指導をいただくということになります。

居合を習いだして今までわからなかったことに気づくようになりました。本を読んだり、テレビの時代劇を見ていたらいろいろなことに気づくのですが、坂本龍馬が暗殺されたときに額を横に斬られている。それは最初の1本目「前」の「抜き付け」みたいな技だったのだと思います。

全日本剣道連盟居合

四本目 柄当て

前後に座っている二人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の水月に柄頭を当て、続いて後ろの敵の水月を突き刺し、さらに正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。



4本目の「柄当て（つかあて）」という技ですが、これも私の写真で、資料にもありますが敵が二人前と後ろにいて、二人とも倒すという技です。正面の敵には刀を抜かずに刀の「柄頭（つかがしら）」をそのまま鳩尾（みぞおち）にぶつけて、相手はすごく痛くてとりあえず攻撃ができない状態にしておく。その間

に後ろの敵を振り向いて刺します。刺しているのが左の写真です。刺した刀を抜きながら鳩尾に攻撃した敵を上から斬る。そして、二人倒しましたということで、刀に着いた血を払って納刀するという技です。さっき言った柄頭というのがこれです。これで全力でやったら相当痛いので、それなりに攻撃力はあるかなと思います。この技は「居合膝」という、座っている状態からはじまる技です。「居合膝」というのはあぐらみたいな感じなのですが、ちょっと違っています。刀をつけて甲冑を着けていると正座ができないので、このようなすわり方になったようです。その座り方のバランスが難しくて、立ち上がる時にう

まくやらないとぐらぐらします。これが難しいポイントだと思います。

全日本剣道連盟居合

七本目 三方切り

前進中、正面と左右三方の敵の殺気を感じ、まず右の敵の頭上に抜き打ちし、つぎに、左の敵を真っ向から切り下ろし、続いて、正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。



7本目が「三方切り」という技なのですが、これは前の方に3人いるという想定です。最初に右の敵を斬りつけて、その後ろにいる左側の敵を倒し、その後に正面の敵を倒して勝つと技です。左の方の写真が一人目を攻撃するところです。右の写真が3人倒した時に刀を構えて、3人

が起き上がらないかを警戒している状態です。相手が死んだことが確認できたら、また血振りをして納刀するという形です。

それぞれ始めたころは難しくてできないのではないかと思っていたのですが、意外といろいろなことに気づくことが楽しくて、今までと違ったテレビや本の楽しみ方もできるので、すごくおすすめです。今まで読んで面白かったのは「塚原ト伝12番勝負」という本が相当面白かったので、ぜひ興味があるなら読んでいただきたいです。

今は共通して決められた12本の技について説明しましたが、元になった古流という技の話をします。古流も相当、技の数がありまして、最初に古流にはこの12本の技があります。だいたいが座った状態からはじまるので、立ったり座ったりが結構きついです。刀礼とか座り方も先ほどまでの12本とはちょっと

ずつ違います。写真を用意しましたので、皆さんには雰囲気だけでも分かってくれたらと思います。自分でかっこいいと思っているものを三つ選びました。

一個目は「流刀」という技ですが、これは敵が斬りつけてくるのを受け流して刀を肩に担ぐようにしてから斬

夢想神伝流(古流)

流刀

左側から頭上に斬り付けて来る敵の刀を左に受け流し、身体を右斜め前方に開き敵を斬る。



るという技なのですが、肩に担いでやっている先生方を見るとものすごくカッコ良くて、いいなと思うのですが、自分がやると思っていたのとちょっと違ってしまいう技です。もたもたしていかっこ悪くなってしまう。ちゃんとやっているのを見ると相当かっこいいので、本当におすすめです。

夢想神伝流(古流)

逆刀

正面から来る敵の刀を後退して外し、退く敵を追って倒す。



夢想神伝流(古流)

勢中刀

右側から切り下してくる敵の両手を切り払い、退く敵を追って倒す。



次の「逆刀」も私としてはかっこいい技と思っているのですが、相手を追いかけて斬って最後に写真のような形で止め（とどめ）を刺すといった技です。これもかっこいいのですが、自分がやると今一つで、難しいです。納刀とか技の途中でも先ほどお話した 12 本の技に似ているところがあり全く新しいものを覚えるわけではないので、覚えやすいかもしれません。

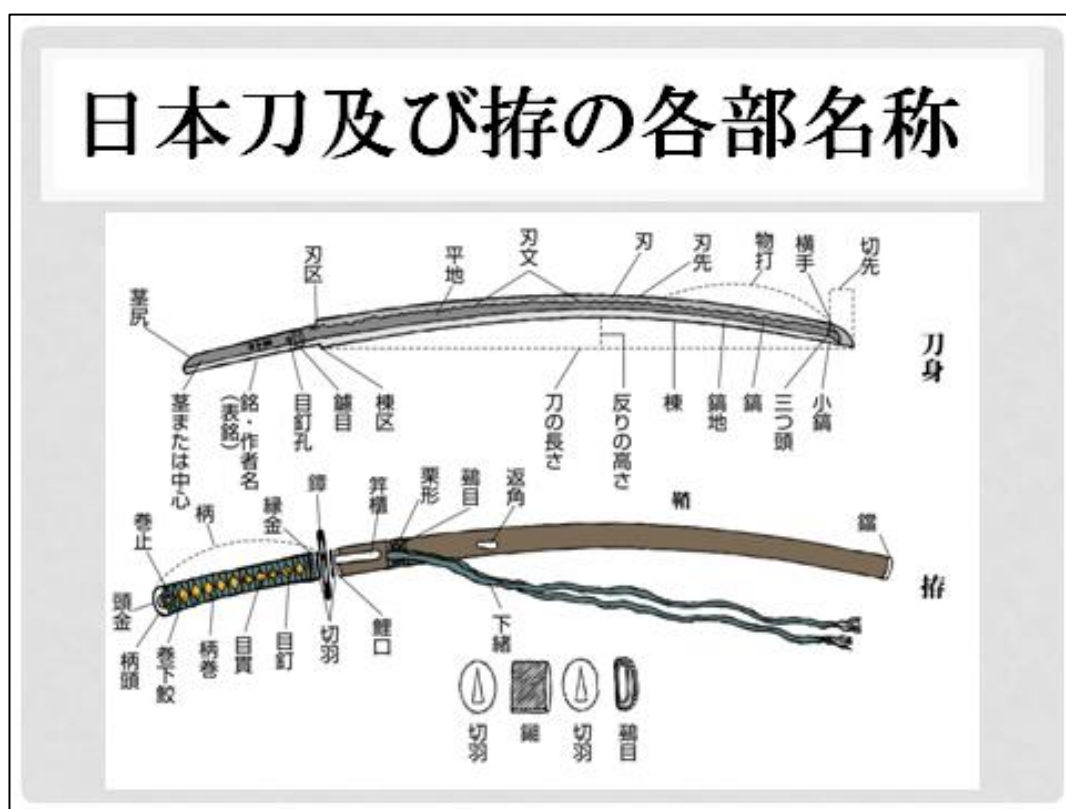
最後は「勢中刀」ですが、個人的には技が短いので 6 分の制限時間が気になるときこれを入れようと思っていました。岩手の大会だと決められた全日本居合連盟から三本指定されて残り二つは好きなのをやってくださ

いと言われるんですが、この二つを古流からやってくださいと言われる時があって、そういう時にはこれを入れればまず時間オーバーすることはないなと思っている技です。これも相手は一人です。左向きに座って正面を向いて斬るのですが回ろうとしているのが左の写真で、相手を斬ったのが右の写真です。回るところが難しくてぐらぐらします。そこがちゃんとできるとかっこいいと思うのですがこれも難しいです。他にももっとこのような技があるのですが少し

ずつ似ているところがあるので、いっぺんに習うと忘れてしまったり、混ざってしまったりして、なかなか難しいです。

私がいろんな技をみたり、教わったりしたなかでびっくりしたのは、暗闇であるという想定で自分のいる場所をここではなく、あっちだとかまかす技とか、お辞儀をするふりをして相手を斬るだとか、一緒に歩いていたはずの人を後ろから斬ってしまうとか結構ずるい技があって、こんなのいいのかと思ったりするのですが、ずるくても負けてしまうと死んでしまうことになるので、勝たなければ行けません。ただ、ずるい技も結構カッコ良いです。ただ難しいのです。

そういうわけで、居合をやったことがない方も興味をもって初めていただければなと思います。難しいなと思うこともあるかもしれませんが、それぞれみなさんの年齢とか性別とか体力にあわせた練習をしますし、道具も体にあったものを使うので、他の競技よりもハードルは低いと思います。私が震災で全部失っても、もう一回やろうという気持ちを持っていたのは、年をとっても続けられるなと思って途中でやめる気がしなかったということもあると思います。



次に日本刀の名前を紹介したいのですが、こんな感じで日本刀のいろんなところにそれぞれ名前がついています。上の方の刀の頭身の部分ですが、刃の右

の方の物打（ものうち）というのがこの辺で、この辺が一番斬れるらしいです。ものうちの反対側が鑢（しのぎ）と言います。刀は少し反っていますが、これは斬味よくするための反りです。下の方の拵（こしらえ）の方ですが、手に持つ部分と頭身の間にあるのが鰐（つば）です。これは鞘（さや）と言います。この鞘の部分が魚の鯉の口の部分似ているので、鯉口と言います。この鰐と刀の間に切羽ですとか、鋤（はばき）、鵝目（しとどめ）と言われるものがあります。

今、名前をあげて紹介した刀の名称を使った言葉があるので、最後にそれをご紹介したいと思います。まず刀に関係しているものということで、「真剣勝負」というのがありますが、真剣で勝負をするということで本気で勝ち負けを争うこと、本気で物事に当ることを言います。その次にご紹介しました鑢（しのぎ）、この辺ですね。「鑢（しのぎ）を削る」ということは闘ったときに互いの刀が削れるぐらい強く、戦っているということで激しく争うなどの意味になっています。それから「抜き差しならない」ということで、普通の刀は抜けるし、簡単に戻せるのですが、それができないということで、どうしようもない、解決方法がないという意味の言葉です。それから「身からでた錆」という言葉がありますが、練習をしないで放って置きますと刀が緑っぽくなり、錆がついたようになってしまいます。手入れをしないとそうなりますので、自分自身が原因で苦しむようなことをいいます。それから先ほどご紹介した鰐ですね。「鰐競合い」打ち込んで、この鰐のところで受け止めたりして、力が拮抗してしまて激しくやり合っているという意味です。それから「反りがあわない」。切れ味のことでお話ししましたが、当然ですがそれぞれ刀と鞘は合うようになっているので、全ての刀が同じになっているわけではありません。なので、合わないと入らないので、これをもとに気が合わないというようなことを言います。それから「切羽詰まる」、先ほどお話した、鰐と刀の間にあるものなのですが、この「切羽」というのは、止めているので、これは全然動かないですね。これが動かないぐらい物事がさし迫り、身動きがとれないというような意味です。「相槌を打つ」、刀を作るときに刀鍛冶の方が交互に刀を打つことで、相手の話に合わせて話を聞く、話を合わせるようなことを言います。それから最後に「付け焼刃」、刀の刃がなくなったり、鈍くなったりしているものに鋼を付け足してとりあえず凌ごうということで、一時的な間に合わせみたいな言葉になります。

今日これらの言葉を紹介しましたが、写真を撮ったのが今月に入ってからで

◇◆◇第 69 回ウォーターフロント研究サロン◇◆◇

して、古い写真もありましたがなかなか撮れなくて切羽詰まるような状態で今日ここにきました。幸い付け焼刃の状態で皆さんには相槌を打っていただいたということで楽しくお話できましたので、この機会に居合道に少しでも興味をもっていただけたら幸いです。今日はありがとうございました。



ご清聴ありがとうございました

平成 26 年 10 月 20 日「居合道と私」 国土交通省居合道部 三浦尚子
全日本剣道連盟居合（解説）より

一本目 前

対座している敵の殺気を感じ、機先を制してこめかみに抜き付け、さらに真っ向から切り下ろして勝つ。



1. 正面に向かって正座する。静かに刀に両手をかけて鯉口を切り、腰を上げながら刃を上にしたまま、鞘引き¹とともに刀を抜き出し、両つま先を立てて鞘を左へかえし始め、鞘放れ²寸前に刃を水平にし、腰を伸ばして右足を踏み込む³と同時に敵のこめかみめがけて激しく抜きつける⁴。

注 1 鞘引き 左手は鯉口からはなすことなく、小指を帯に押しつけて左こぶしをじゅうぶん後方に引くこと。

2 鞘放れ 切っ先が鞘の鯉口から放れること。

3 踏み込んだとき、左足のつま先は左膝の真後ろとなって両膝が直角となるようにじゅうぶん腰を入れ、上体をまっすぐにして丹田に力を入れる。

4 抜きつけたとき、上体は約 45 度左へ開き、右こぶしは右斜め前方で止める。切っ先は右肩よりわずかに下げ、右こぶしよりやや内側で止める。

2. 左膝頭を右かかと近くにおくと同時に鯉口をへそまえにもどしながら切っ先を左耳にそって後ろを突く気持ちですばやく刀を頭上に振りかぶる¹。振りかぶると同時に左手を柄にかけ、間をおくことなく右足を踏み込むと同時に真っ向から切り下ろす。²

注1 振りかぶったとき、切っ先を水平より下げない。

- 2 切り下したとき、左こぶしはへそまえで止め、切っ先を水平よりわずかに下げる。体勢は、前項の注3と同様である。

3. 左手を柄からはなして左帯におくと同時に右手のたなごころを上にかえて刃先を左に向け、そのまま右へおおきく肩の高さに回して肘をまげてこぶしをこめかみに近づける。立ち上がりながら袈裟に振り下ろしての血振り¹をして居合腰²となる。

注1 袈裟に振り下ろしての血振りは雨傘の雫を振りきるときと同じ要領で行う。振り下ろしたとき、右こぶしは左手と水平の高さで右斜め前方となり、切っ先は約45度前下がりとなって右こぶしよりやや内側で止める。このとき刃先は振り下ろした方向に向く。

- 2 居合腰 残心の気構えで両膝をわすかにまげ、腰をおとした姿勢。

4. 居合腰のまま後ろ足を前足にそろえ、続いて右足を引く。左手を左帯から鯉口におくって納刀¹し、納め終わると同時に後ろ膝を床につく。

注1 納刀のとき、左手は鯉口を中指で握って親指と人さし指の握りをゆるめ、右手は鰐元近くの棟を左手の親指とまげた人さし指のくぼみにおくる。右肘を右斜め前方に伸ばして切っ先を左腰近くにおくとともに、左手の鯉口も左帯近くにおくって切っ先を鯉口に入れる。刀を納めはじめるとともに左手で鞘をわずかに引き出してこれを迎え、静かに両手で納め終わって鰐に左手親指をかける。納め終わったとき、鰐はへそまえとし、刀はほぼ水平にする。

5. 立ちあがると同時に後ろ足を前足にそろえる。右手を柄からはなして帯刀姿勢¹となり、左足より退いて元の位置にもどる。

注 1 帯刀姿勢 刀を帯にさした姿勢。

四本目 柄当て

前後に座っている二人の敵の殺気を感じ、まず正面の敵の水月に柄頭を当て、続いて後ろの敵の水月を突き刺し、さらに正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。



1. 正面に向かって居合膝¹で着座する。すばやく刀に両手をかけて腰を上げ、左足のつま先を左膝の真後ろに立てて腰を伸ばし、右足を踏み込むと同時に、両手で鞘もろとも刀を前に突き出して柄頭で正面の敵の「水月」に激しく当てる。

注 1 居合腰は次の要領で着座する。帯刀姿勢から袴捌きののち、両膝を折りまげて左膝を床につき、右足を左膝の内側におくって左つま先を伸ばす。右足は膝を斜めに傾けて立てて足裏右の方で床を踏み、尻を左かかとにのせて上体を落ち着ける。両手はたなごころを下に向けて軽く握り、両腿の中程に置いて「作法、五の 3」「正座の姿勢」*にならって正しい姿勢となる。

2. 直ちに左手で鞘だけ後方に引きながら後ろの敵に振り向き、左膝頭を軸に左足のつま先を右に回して上体を左に開いて抜き放つと同時にものうち近くの棟を左乳に当てて刃を外側にする。間をおくことなく、左手を内側にしばって鯉口をへそまえにおくと同時に右肘を伸ばして後ろの敵の水月を突き刺す。
3. 正面の敵に振り向き、左膝を軸に左足先を元にもどすと同時に刀を引き抜きながら頭上に振りかぶり、左手を柄にかけて正面の敵に向き直ると同時に真っ向から切り下ろす¹。

注1 切り下したとき、切っ先や体勢は「一本目、動作の2の注2」と同様である。

4. そのままの姿勢で、左手は柄から離して左帯におくと同時に右手の刀は右に開いての血振り¹をする。

注1 右に開いての血振りをしたとき、右こぶしの位置は右斜め前方にあつて、その高さは左手と水平にする。刃先は右に向け、切っ先はわずかに下げ、右こぶしよりやや内側で止める。

5. 左手を左帯から鯉口におくって納刀しながら前足を後ろ足に引きつけて腰を落ち着け、片膝ついた蹲踞の姿勢となる
6. 腰を伸ばし、右足を踏み出して立ち上がると同時に後ろ足を前足に揃える。右手を柄からはなして帯刀姿勢となり、左足より退いて元の位置にもどる。

七本目 三方切り

前進中、正面と左右三方の敵の殺気を感じ、まず右の敵の頭上に抜き打ちし、つぎに左の敵を真っ向から切り下ろし、続いて正面の敵を真っ向から切り下ろして勝つ。



1. 右足より正面に向かって前進し、左足を踏み出したときに刀に両手をかける。正面の敵を押しながら刀を抜き出し、右の敵に左足を軸にして向き直ると同時に右足をやや前方に踏み込んで敵の頭上からあごまで抜き打ちする。
2. そのままの足踏みで右足を軸にして左の敵に向き直りながら刀を受け流しに頭上に振りかぶると同時に左手を柄にかけ、間をおくことなく真っ向から切り下ろす。
3. 左足を軸にして正面の敵に向き直りながら刀を受け流しに振りかぶり、右足を踏み込むと同時に真っ向から切り下ろす。
4. 右足を引きながら諸手左上段の構えとなって残心を示す。
5. 左足を引きながら左手を柄からはなして左帯におくると同時に袈裟に振り下ろして血振りをする。
6. 左手を左帯から鯉口におくり、そのままの姿勢で納刀する。
7. 後ろ足を前足にそろえ、右足を柄からはなして帯刀姿勢となり、左足より退いて元の位置にもどる。

*「作法、五の 3」「正座の姿勢」

背筋を伸ばして丹田に力をこめ、両肩の力を抜いて胸は自然に張る。うなじを伸ばして頭をまっすぐにし、両手を自然に腿上に置く。目は約 4～5 メートル先の床上に向け、半眼に開いて遠山の目付けとなり、気は四方にくぼる。